人間の安全保障を考える(1)

－茂木敏充外務副大臣をお迎えして－

開倫塾
塾長　林　明夫

林　明夫：おはようございます。開倫塾の塾長の林明夫です。今朝も開倫塾の時間を聞いていただいてありがとうございます。今朝は、大変貴重な時間の中を外務副大臣の茂木敏充先生においでいただきまして、イラクについて、そして日本の外交政策についてお聞きしたいと思います。先生、よろしくお願いします。

茂木敏充外務副大臣：おはようございます。どうぞよろしくおねがいいたします。

林　明夫：今朝もサンデープロジェクトに出られたあとに、この放送局までお越し頂いたそうですが、お忙しいところありがとうございます。

茂木敏充外務副大臣：いえいえ。

林　明夫：先生は、この間イラクの方にお出でになったそうです。ぜひ、お話をお伺いしたいと思います。よろしくお願いします。

茂木敏充外務副大臣：5 月の上旬に、イラクのバグダットに行ってきました。おそらく主要国の政府高官としても、始めてのバグダット入りということになったんじゃないかと思うんですけれど、私は 3 月の始めに、小泉総理の特使としても行ってきました。ちょうど 2 ヶ月ぶりにバクダットに行ってきまして、戦前のバグダット、そして戦後のバグダット、いろいろ違いが分かったなという気がしています。

林　明夫：どのような違いがありましたでしょうか？

茂木敏充外務副大臣：まず行き方ですね。3 月に行った時はまだ空港が使えましたから、飛行機でお隣のヨルダンのアンマンから 1 時間半で行けたんですよ。ところが今回はまだ飛行場が使えませんから、陸路、同じ所から 950 キロ走りました。

林　明夫：大変な旅だったんですね。

茂木敏充外務副大臣：ええ、ちょうど東京から福岡位ですね。それ位の距離を、10 時間で走りまして、道は非常に良かったですよ。ほとんどそういった意味のインフラというか施設っていうのは壊れていないなということを感じました。ただ、バグダットの市内に入りますと、やっぱりゴミが散在していたり、いかにも治安が悪いなぁということは感じましたね。

林　明夫：アメリカ軍もわざわざハイウェイとか、そういう大きな道路は避けて爆撃したわけですか？

茂木敏充外務副大臣：今回の場合は、精密誘導兵器と、本当に必要な所だけ破壊するという形で、それはバグダットの市内でも、例えば政府機関とか軍事施設とかに分けてなされたなぁと思うんですね。むしろ、だから今の問題は、治安を一日も早く回復することが大きいのだと思います。それから同時に、戦争前から動かない機械とかあるんですよ、色々。そういうものを直していかなくてはいけないと思っています。

林　明夫：先生、学校とかも行かれたそうなんですけれども、どんな様子だったでしょうか？

茂木敏充外務副大臣：ちょうどバグダットの旧サダムシティという、バグダットの中では北東部なんですが、今サウラ地区と呼ばれていまして、比較的低所得層の人達が住んでいて、治安も悪い方なんです。その学校に行くと校長先生がすごく喜んでくれまして・・・

林　明夫：良かったですね。

茂木敏充外務副大臣：何故かというと、日本から外務副大臣が来たということで、その日は生徒が 8 割位登校してきました。

「いつもは何割なんですか」と聞くと、「半分来ていないですね」と。

「どうしてですか？」と聞くと、やっぱり治安の状況がまだ悪いので、なかなか外に出られない。特に女の子なんかは親がやっぱり外に出すのは危険だ、こういうことで学校に登校できないそうです。そういうことからも、治安の問題というのは大きいなと思いましたね。

林　明夫：そうですか。病院にも行かれたとお聞きしましたが。

茂木敏充外務副大臣：イラクと日本というのは、1980 年代の前半まで非常に良い経済関係がありまして、日本の支援で作った病院がたくさんあるんです。ベッドの数で 400 床という病院ですから、相当、例えばですね、自治医大クラスか独協クラスか分かりませんけれど、大きな病院というのが、イラクの国内で 13、日本が造ったのがあります。それを見てきたんです。そうすると、何か、その、病院の中庭は日本庭園風に造ってありまして、京都のお庭というか石庭みたいな形で、岩があったり、砂があったり、もともとは静かだったんだろうなぁと・・・でも今はそういう所にニワトリを飼ったりしていますね。困っちゃうなあと思ったんですが・・・。レントゲン室に行ってみると、島津製作所のレントゲンとか、エレベーターも発電機も厨房もみんな日本製と、こういう感じなんですね。

林　明夫：そうですか。

茂木敏充外務副大臣：良い機械は入っているんですけれど、1980 年代からもう 20 年間全くメンテナンスしていない。部品も入れ替えていない。ですから聞いてみると、レントゲン室も機械はあるんですけれど使えるのは 2 割なんです。

こういう向こうの病院の先生のお話でして、私が今回バグダットに行って一番強く感じたのは、イラクの復興というのは、単に今回の戦争で壊れたものとか、戦争のあとの略奪、例えば博物館とか相当略奪にあっているんですけど、そういう戦後の略奪、それを復旧するというより、むしろその前の 20 年間フセイン政権の下で軍事部門とかそういうところにお金が回って、民生部門のほとんどにお金がいかないために、機械も使えない、電力のシステムにしてもそうですし、そういうところを直していくと。まさに、失われた 20 年、これの回復がイラクの復興なんだなぁ、そういうことを非常に強く感じましてね。

林　明夫：イラン・イラク紛争もありましたものね。
茂木敏充外務副大臣：ええ、あれが 1980 年ですね。

林　明夫：それから 20 年間失われてしまったということですか。
茂木敏充外務副大臣：はい。

林　明夫：私にとって先生の報道の中で一番印象的だったのは、日本大使館で先生が日本の国旗を揚げるところでした。大使館の方は喜ばれたでしょうね。
茂木敏充外務副大臣：アンマンは朝の６時位に出ました。何しろ日が高いうちに、昼間のうちにつかないとまだ略奪とかある。ちょうど夕方の５時にバグダットの日本大使館に着いたわけですけれども、私も聞いていなかったんですが、大使館の庭に日の丸を上げてくれ、こういうことでですね、日の丸を自分で国旗掲揚したのは小学校以来かなぁと。こういうことで、何か懐かしい思いもありました。やっぱり異国にあって、ああいう所で日の丸がはためいている、やっぱり日本人だなあと、こんなことも感じました。

林　明夫：大使館の方喜ばれていましたよね。
茂木敏充外務副大臣：ええ、そうですね。

林　明夫：最後に、放送をお聴きの皆さん、栃木県の皆さんにこれだけは知っておいてもらいたい、ご理解いただきたいということがありますでしょうか。
茂木敏充外務副大臣：やっぱり、これ例えばですね、いろんな国で今、紛争があったり、新しい平和づくりとかやっているわけですね。アフガニスタンもそうでした。最初は日本の国民の皆さんとか地元の皆さんも非常に関心をもっている。ただおそらく、半年・１年過ぎるとそういう関心が急速にアフガニスタンについても薄れていってしまう。おそらく、今、イラン・イラクの問題というのはたくさんの方が興味をもっていると思うんですけど、イラクの本格的な復興というのは、1 ヶ月 2 ヶ月で決して終わらなくて、2 年・3 年・5 年と、長い月日が必要なんだと思います。是非関心をもち続けてほしいなという思いもあります。またそういった中で、イラクの子供たち、サッカーが大好きですから、余っているサッカーボールがあるとかですね、何かそういうことで、身のまわりで応援できることがあったらぜひご協力いただきたいなと思っています。

林　明夫：ありがとうございます。今日は非常にお忙しい中、外務副大臣の茂木敏充先生をお招きをして、開倫塾の時間をお送りしました。実は来週もご出演いただくということで、先生またよろしくお願いいたします。

茂木敏充外務副大臣：こちらこそ、よろしくお願いいたします。

林　明夫：ありがとうございました。

※ この文章は、2003 年 5 月 25 日に栃木放送足利支局で録音し、5 月 31 日に放送した内容を林明夫が 6 月 15 日に自らの責任でまとめさせて頂いたものです。